

自然地域の管理とリスク認識 —リスク回避度を用いた分析から—

○庄子康（北大）・久保雄広（北大院）・柘植隆宏（甲南大）・愛甲哲也（北大）

はじめに

近年、国立公園などのレクリエーション地域において、リスク管理が大きな社会問題となっている。本研究では Holt and Laury (2002)のリスク回避度を、選択型実験の評価に組み入れることで、人々のリスク認識がレクリエーション行動にどのような影響を与えているのかを分析する。

調査方法

リスク回避度は図1に示すように、二者択一のくじを回答者に提示して、それを選択してもらうことで評価を行う。当たりはずれの確率を変化させた複数の組み合わせを提示し、どのような組み合わせで選択を変化させたのかを観察する。このリスク回避度は、人々の全般的なリスク認識を評価する尺度であるが、レクリエーションのリスク認識の評価にも用いることができる（庄子他，2010）。

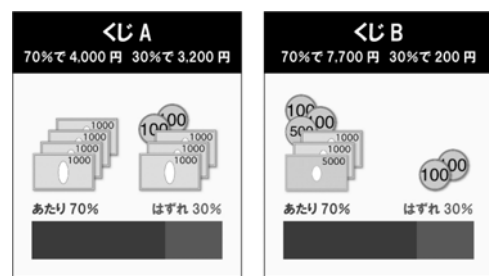


図1 リスク回避度評価のための質問

選択型実験のデータは、大雪山国立公園の高原温泉における、ヒグマとの遭遇リスクのあるハイキングを対象としたものである。この選択型実験では、ヒグマの出没状況や管理状況が異なる複数の歩道状況を提示し、どのような歩道状況であれば利用するのかを、WEB調査によって聴取したものである。WEB調査は2009年12月に（株）日経リサーチのモニターを対象として実施した。4,000名のモニターに対してアンケートの協力依頼を送信し、最終的に931名からの回答を分析に用いた。分析は条件付ロジットモデルを用い、リスク回避度は属性変数との交差項として分析に導入した。

結果と考察

平均的な回答者は、歩道にヒグマの痕跡がある状況やヒグマの姿を見かけるような状況を好ましくない状況として評価していたが、リスク回避的な回答者ほど、それらをより好ましくないと評価していた。一方で、ヒグマとの遭遇リスクを減少させるような管理状況に対しては、リスク回避度は影響を与えていなかった。

引用文献

- (1) Holt, C.A. and Laury, S.K. (2002) Risk Aversion and Incentive Effects. The American Economic Review 92(5), 1644-1655
- (2) 庄子康・柘植隆宏・愛甲哲也・柴崎茂光・久保雄広・山本清龍・八巻一成 (2010) レクリエーション地域における一般市民のリスク認識—WEB アンケート調査の結果から—, 林業経済学会 2010年秋季大会要旨集.

キーワード：リスク回避度，選択型実験

(連絡先：庄子 康 yshoji@for.agr.hokudai.ac.jp)